

## 聖地と葬地

—鹿兒島県大島郡徳之島町—

高野 洋志

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2002年11月1日 受理)

### はじめに

徳之島は行政上、徳之島町、伊仙町、天城町という3つの村に分かれている。それぞれ、地形、文化そして産業の面で特徴があるが、ここでは徳之島町の諸集落のみを対象に、その聖地と葬地について考察する。

徳之島町のいくつかの集落では、琉球王朝下でノロが各集落の信仰を司っていた頃にまでさかのぼる祭祀空間の痕跡が、道路工事や土地開発事業など幾多の開発の波にさらされながらもいまだに保存されている。かつての信仰は葬地と密接な関係を持ち、風葬地の近くに聖地がある場合や、聖地に墳墓が見られる場合もある。そのことに関連してグスク、テラ、森と呼ばれている場所が、集落の空間のなかで住民にどのような意味をもちどのような感情を呼び起こすのか検討し、非均質で目にみえない境界によって区分された集落の空間を浮かびあがらせることを試みたい。

徳之島が琉球王朝の政治勢力下に入ったのは15世紀前半であり、1609年の薩摩藩の琉球侵攻まで続いた。その間にノロ制度がそれまでの信仰にかぶさる形で導入され、各集落の祭祀がノロ中心に行われた。薩摩の直轄地になってからは、ノロ祭祀は圧迫され、衰退していった。

徳之島町は島の東部から北部に位置している。南西諸島を行き来する定期航路のフェリーは、昔から良港のある天城町の平土野と徳之島町の亀徳に寄港する。しかしかつては徳之島町の山港にも沖縄と九州を結ぶ航路の貨物船が寄港していた。

地形的に徳之島町南部は起伏の多い台地をなし、中部は標高645mの井之川岳から北西にのびる山地がありその山裾から海にむかってなだらかに傾斜する地形になっている。また北部にも天城岳を中心とする山塊があり、とりわけ金見崎から手々にかけては山が海に迫っていて、耕作可能な土地はきわめてせまい。



図1 徳之島町の諸集落

### 1 手々

#### 聖地

集落の信仰の中心は水神で、一番上手の山裾にある。岩山を成していて、そばに溪流があり、集落の水源となっている。水神様をまつる神社からかつてノロが通った神道が海に向かって左の神川（ノロが禊をする

川ということでこう呼ばれた)の谷にむかって下りている。この神道は谷を通して集落の中に入り、県道のそばの箒り場を経て県道を渡り、上殿地を通り、ノロ文書(注1)の保存されている深見家のそばにあった祭祀場に降りていく。

#### 墓地とグスク

手々の墓地は集落の西方海岸近くにある。共同墓地のそばにはヌル(ノロ)墓と掟大八目の墓がある。掟大八目は琉球王朝時代の役人で部下とともに葬られているといわれ、通称アジ墓とよばれる。またこの近くには「大和グスク」という小丘があり、その中腹の洞穴に人骨があるといわれている。徳富重成氏によれば「地の人の伝承によると洞穴には剣や三味線があったといい、雨の日には那覇歌(怨霊歌)が聞こえたといわれ、恐れられた聖地である」(注2)。ただし、恐れられてはいても、ここが祭祀の場所ではなかった。

## 2 山

明治時代まで集落は、天城岳の遥拝所であるナゴロ神社のあたりにまとまっていた。港が整備され、九州と沖縄を結ぶ航路の船舶が寄港するようになってからは、現在の県道沿いに人口が移った。

#### 聖地

ナゴロ神社は小丘をなし、入口に鳥居が立っただけである。祠の中にはいくつかの石が置かれている。また祠の脇には小さな石積み、裏手には大きな石積みがある。大きいほうの石積みについては、60年ほど前までは中に頭蓋骨が見えたという古老もいる。薩摩藩の禁令下でも信仰を守っていた最後のノロの墓だといわれている。ナゴロ神社の入口に面した殿地跡には「ガジュマルガナシ」と呼ばれ神木扱いにされている古木がある。

ナゴロ山にはまた別の伝承がある。昔ノロ神を信仰していた女性が隠し子を生んでここに埋めたが、自分もさほど時をおかず死に、その際に子供と同じところに埋めるよう望みそのとおりにされた、というものである(注3)。

山の赤田家には、神山である天城岳との関係が強い「赤田松」の物語が伝わっている。この物語の舞台となっているのは、集落の近くを流れる港川の上流域にあたる山奥で赤田松(アダンマツ)と呼ばれる古木のあるあたりである。そこにユネムト(米元)とカンチバという夫婦が住んでいた。農業と海や川での漁をする2人の間には2人の子供があったが、ある日カンチバが天城岳を見上げたとき不思議な光が差ってきて3人目の子を見ごもった。やがて生まれた女の子はカンワバナと名づけられ、7歳になるまで元気に育った。しかし、2人が昼間留守をして夜帰ってみるとカンワバナだけ見当たらなかった。いくら探してもみつからず、集落中の人々にも探してもらったがみつからなかった。しばらくしてカンチバの夢の中に行方不明の娘が現れ、「自分は天城岳の神の子で、神のもとに帰ったのです。その証拠をみせるので翌朝日の出の頃天城岳をみなさい」という。夫婦がそのとおりにすると、日の出の時刻に天城岳の山頂から中腹まで五色の幟がひるがえった。数ヶ月して父親が漁に出て帰りがけ、神々の行列に出遭った。するとその先頭にカンワバナがたっているのを見かけ、走り寄った。しかしカンワバナは父親を田圃に投げ飛ばしてしまった。あとで、姿をみてしまうと恐ろしい災いが降りかかるといわれるイワトシ神を父親がみないように、娘が配慮してくれたのだとわかる。それからは赤田松の根元に朝夕膳を供えることにした。また不思議なことが次々に起こるので、一家は山を下り、里に移り住んだ(注4)。

以上がこの物語の概要である。今でも赤田松のあたりは木の枝一本も切ってはいけないといわれ、禁忌の強い恐れられる場所である。集落で子供が生まれる前には赤田松で石の音がするとも言われている。標高の高い場所であるが、谷あいであるので水は豊富である。そのためかつては水稲耕作が行われていた。天城岳は天城町側に伝わる神話では、アメンキユという男女2神が降りてきて稲作を伝えたことになっているので、ユネムト(米元)という名は、その神話に関連づけたものであろう。

#### グスク

もうひとつ子供が登場する物語が山には伝えられている。舞台は石グスクと呼ばれる山裾の小丘である。1996年3月発行の「山だより」に「石城のガイ骨」と題して柳氏が記している内容は次のようなものである。妻に先立たれ、女兒をひとり持つ男が、金見の女と婚約する。女は男の一人娘を邪魔者として、男に殺すように言う。男は娘を石グスクに連れて行き、逡巡したあげく、夕暮れ近くなってようやく斧をふりあげ斬りつけ、娘が倒れたのを見てから金見の女のところに行った。翌日娘の遺体を片付けに石グスクに行くと、娘はまだ生きていて、父親に「なぜひと思いに殺してくれなかったのか」という。父親は鎌でとどめを刺し、

やはり金見に行った。

山の人々は、「石グスクに子供の骨のあるのを見た」、「殺された娘が断末魔の苦しみに草をかきむしっていた場所には草が生えない」、あるいは「夕方石グスクの近くで農作業をしていて、女の子の泣き声を聞いた」と話している。

これら3話に登場する子供はなぜ行方不明になったり殺されたりするのであろうか？「7歳までは神の子」といわれる理由として、子供の死亡率が高かった時代には、生産活動にもまだ加わず、人口のうちにまだ数えられない小さな子供は、その存在自体が境界性を持っていたことがあげられる。社会の正式なメンバーとして承認される以前に、病気、事故、そして大人の恣意にさらされ、あの世からやってきたが、いまだにこの世にその正式な場所を持たない不安定な存在である。それゆえ死んだ幼児は正式な葬儀の対象とならなかった。徳之島でも家の土間、雨だれ、あるいは屋敷内に埋める習慣があった。これは近い他界に送り返すすぐあらたな命として再生を願う行為であった。

赤田松の伝承は、神隠し譚であるが、この話のそもそもの発端は、舞台となった場所が神山である天城岳に近く、その神域と人里との境界域であったことだ。またイワトシ神と父親との間に立って神の怒りを宥和する部分については、旧暦10月のカネサルといわれる日には山の神が山や海を行き来するので、外に出てはいけない、神の姿を目にすると災いが降りかかるといわれてきた信仰に対応しているが、娘が一種の犠牲の役割を演じていることを思わせる。

最終的に赤田家の祖先は山を下り、赤田松を神域として放棄するに至る。しかし、聖地となった赤田松の由来を伝えるこの伝承により、赤田家は天城岳を頂点とする集落の宇宙観と人の社会を具体的に結びつける特別な家系となった。

ナゴロ山の伝承は嬰兒殺しの話である。かつて嬰兒殺し、あるいは間引きはありふれた行為であったと考えられる。しかし、いわば神山である天城岳の飛び地として、ノロ祭祀の中心地であるこの場所、すなわち聖（天城岳山頂）と俗（集落）との境界に、埋められたこと、さらに母親も望んでここに葬られたことが、話に供儀の性格を強く持たせる結果になった。

石グスクの伝承もまた供儀の要素の強い物語である。娘を殺す父親は毎日のように隣の集落である金見に通う。しかし瀕死の傷を負った娘は、生と死の境界の状態、集落の北（金見方向）の入口にある石グスクでもだえ苦しみがら一晚過す。流された血と痛みこそがこの石グスクを、北の境界を守る恐ろしい場所にする。石グスクで子供の白骨を見たという話は、もともとこの場所が風葬地であったことを示すものかもしれない。

3つの伝承の舞台にはもう1つ共通要素がある。それは地形である。赤田松から少し上手には大きな石が積み重なったところがある。ナゴロ山は岩山であり、石積み墓がある。さらに石グスクはその名の通り巨石が小丘を成している。こうした場所自体は畑とすることができない不毛の空間であるが、供儀の要素を含んだ伝承の舞台となり、石グスクをのぞき信仰の場所ともなっている。

### 墓地

県道に沿って海側にあるのが、ウシコドーラ、ハータンジシ、カニイクの3箇所の墓地で、北東にやや離れて海に突き出しているのがウキントウである。赤田家系統の墓はここにある。それぞれの墓地には親墓と呼ばれるものがあり、最初に葬られた者の墓であるとも言われ、人を葬る際にはその親墓にお参りして許可を得る。

### 3 轟木

集落の起源は、西の分水嶺付近にあった大城（フーグスク）から下りてきて現在の集落を作ったとされる。大城には石垣が今も残っているそうである（注5）。集落の区長を務める吉市男氏によれば、かつては大城にも数軒残っていたそうであるが現在は合流している。

### 聖地

集落の守り神が祭られている場所は「テラントウ」と呼ばれる。集落の北東側丘の上であり、もとは大きな松の根元に赤石が置かれていたものであったものを10年ほど前に、集落の出身者で内地に住む者の寄付を募り、社を建立した。社の祭壇には、直径27~28cmの丸い赤石とその両側にサンゴ石、さらに向かって右に大きなサンゴ石が置いてある。これらの石は、かつて浜下りという年中行事で旧暦の7月に、花徳海岸の北部のトドロキバマというところに行っていたこと、また製塩もそこで行っていたので、その浜から持っ

てこられたそうである。

#### 墓地

現在の集落の墓地は集落の南にあり、土地改良事業にともないこの地に移転したものである。一角に 19 世紀初頭からの碑文が残る古い墓石が集められている。

#### 竿地神

県道と集落の間を流れる川には、竿地神（川の神）を祀る場所もあったが、現在はそこで何も行われていない。

### 4 母間

ノロ祭祀が行われていた頃の、集落の形について、松山光秀氏がすばらしい考察を行っている（注6）。

#### 洞穴墓

松山氏に従えば、かつての祭祀空間はカネインゴ（麦田川）とナンゴの 2 本の川が海にそそぐあたりから西に傾斜地をのぼり、山裾に届くあたりまでのびる線上に軸を持っていた。川が海に注ぐところはサンゴ礁が発達せず、良い港になっている。そして 2 つの川口の間にはイシムイという岩山があり、その北側のふもとに、風葬の行われた洞穴墓が開口している。そこから土葬墓が海の側に発達し、ノロの墓もここにある。またカネインゴの川口をはさんで反対側の砂浜は、十五夜浜と呼ばれる昔からの祭り広場であり、かつては浜下りの儀礼も行われたであろうと松山氏は推測している。

#### 線刻画

イシムイのあたりから、平行して流れるナンゴと麦田川の間を山にむかって旧道が上っている。農道と交差して、山林の間を抜けると山裾に昔の棚田地帯がある。その中央部にノロの祭祀が行われたと思われる巨石が 4 つほどほぼ北東から南西の線上に、百数十メートルから数十メートルの間隔をあけて並んでいる。松山氏が詳細な調査を行い一番上に位置する石と一番下手に位置する石に線刻画のあることを確認している。そしてノロを出した家系の末裔に伝えられている話を記している。それは昔全島からノロが集まって第 3 の石の前で豊年祈願祭りを行っていた、というものである。

母間から南西方向に分水嶺を越えて天城町側の、秋利神川流域にも線刻画の見られる巨石がある。地理的な共通点は、水稲耕作と川、そしてその川の川口には港があることだ。

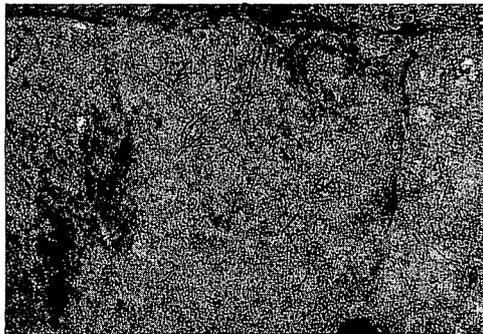


写真1 第1の石



写真2 第3の石

#### グスク

母間にはグスクと宮グスクという場所がある。どちらも東の池間地区にあり、グスクのほうは海に近く（約 200m）、台地状の場所が現在公園となっている。宮グスクのほうはさらに南の山に近いほうにある。葬地であるという伝承は特にない。

### 5 下久志

#### 聖地

母間の南東の県道沿い海側に集落がある。県道の南西側にグシコと呼ばれる丘があり、上が広場状になっていて祠があり水神が祀られている。またその祠のそばに力石が置かれている。徳富重成氏によれば（注7）水神の名前である「アマンナイクラ」は琉球王朝時代のノロの名に他ならない。そして、かつてのノロ祭祀

はグシコの南側にそって流れている川の流域で行われた。この川の上流にユネイト（米元の意か）という拝所があり、少し下って水神を迎えるコウムケエという場所があり、グシコから下流に「イビガナシ」という神石があった。徳富氏はユネイトから川沿いの神道を通してノロがコウムケエで水神を迎えグシコで祈願を行い、イビガナシを回り海浜に下りたとしている。

## 6 井之川

この集落は昔から行商人が多く、徳之島の集落を行き来しながら文化の交流に寄与し、また島外にも進出して活躍してきた。その一方でここは民間信仰の伝統が良く残されていて、徳之島町の他の集落ではみられなくなった貴重な文化財も信仰とともに保存されている。集落は名田川の川口を中心に海岸に沿っている地区と南東の傾斜地の神之嶺地区に分かれる。旧暦7月海岸の風葬墓近くの浜に下り、祖先の霊を歌や踊りで供養し、豊穰と子孫の繁栄を祈願する行事を、「夏目踊り」と呼び今でも盛大に行っている数少ない集落のひとつである。

### グスク

最も山手にあるのがフーグスク（大城）で、南東側すぐ近くに洞穴墓があり、「雨の日には三味線や歌声が聞けた」といわれ恐い場所とされる。またフーグスクでは雨乞いの儀式が行われていた。アガリグシク（東城）はその北東、宝川の下流の海岸近くにある丘で石積が残っている。崖下に洞穴墓、川下にイビガナシが祀られている洞穴があり、さらに海岸には、洞穴墓とその前に石塔墓がある。グシクは県道の南側にある台地で、上には八幡神社、慰霊碑や公民館などがある。崖下の県道脇には洞穴墓の跡がある。このちかくにトネクスと呼ばれる場所があり、かつてノロが儀礼を行った場所だといわれており、仲松弥秀氏はグシクに含めている（注8）。ただしその場所自体は風葬墓があるようなところではなく畑地（以前は水田）である。ウニグシクは岩山でその裾には風葬墓があり、また寺屋敷跡もある。薩摩藩時代に建立された安住寺の跡で、徳之島の仏教（禅宗）普及の中心地となった場所である。以上に加え神之嶺にはカンニングシクという場所があり、そこにはやはり風葬墓がみられる。徳富氏はこれらのグシクがノロの稲作に関連した儀礼を行う場所として相互に関連していたと考えている。

### イビガナシ

宝川の川口近くにある聖地には石に乗った老人の漂着伝説がある。この老人が姿を消した洞穴はウキボシガナシと呼ばれ、祀られている石がイビガナシである。ところで九州沿岸などでは、漂着したとされる石や水中から取って来た石をエビスと呼んで信仰する。井之川の伝説はこのエビス信仰の導入を思わせる。しかしイビガナシは奄美大島などでは本来古い墓地に関して、祖霊の依る石のことをさすのであり、この洞穴は本来風葬墓であったのが、外部から導入されたエビス信仰が重ねられたために今の形になったと考えられる。

### アムト

伊仙町によく見られる「アムト」が井之川でも見ることができる。3カ所あって徳之島町の文化財に数えられている。アムト信仰が何であるかについては諸説がある。伊仙町のアムトはカマド神、鍛冶の神あるいは風葬地であったりする。氏子も特定家系の場合から集落全体まで様々であるが、もともとはあるきっかけとなる出来事があり、個人ないしは数家系の人々が信仰するようになった神と場所が、そのまま特定の家系の信仰として維持されてきたか、集落全体の信仰を集めるようになったかである。どこのアムトも大きな鎮守の森を持つことはない。個人の敷地内や、おもいがけない場所の一角にある。古木の下とか、白砂を敷いてあることが多く、あまり大きくない黒石が1つ、カマド神であれば3つ置いてあることもある。井之川の場合3カ所にあり、それぞれ個人の所有地内である。現在は所有者と区長（所有者が内地在住の場合は区長のみ）が、旧暦の1日と15日、8月15日、春秋の彼岸に神酒、花や米などを供え、家系の安全・繁栄あるいは集落全体の安全祈願をする（注9）。

### 川神

宝川の上流でコウガミサマ祀られていた。この信仰は家系に継承され場所は一定しているが、都合で移されることがある。その際は前の場所の砂、石、水を神体として新しい場所に持っていく（注10）。

水神信仰の儀礼の場所は竿地、ソウズなどと呼ばれ、徳之島では広く見られたが、近年その複雑な形式が嫌われ、方法の子孫に継承しない例が多くみられるようになった。従って、あったということは聞いていても、もはや場所はわからないということが多い。ただしノロの祭祀に取り込まれ、集落全体が信仰するよう

になった手々や下久志の例はある。これはノロが禊をする川と水神信仰のある川とが同じであったからかもしれない。

#### カンジャ神他

同上資料によれば、カンジャは鍛冶のことである。井之川では3つの家で信仰されている。うち1カ所はもともとグシクへの上り口付近にあったが、埋められてしまい現在は個人宅で祖霊とともに祀られている。春秋の彼岸の中日に区長が神酒と米を届けている。

チンチンガナシは屋敷神で、ある家の祖先が大火を免れたのはこの神に必死に祈願したからだと言われ、現在も自宅で祀られている。やはり区長が供物を届ける。ほかにも屋敷神をまつる家が1軒あり、妖怪や悪霊から守るとされている。

その他に、かつてノロ屋敷のあったところであり女性のみにより祀られていたデンナゴ屋敷の力石神、岩から豚の子が次々に飛び出してきてアムトにはいつか消えたという伝承のあるフーシンコ岩神などが個人の家で祀られており、やはり区長が供物を届けている。

これらの信仰の対象は、井之川地区の文化財として町がリストアップしている。注意して内容をみると、力石神のようにノロ祭祀時代からの歴史的遺物や、フーシンコ岩神のように県道脇にせり出している、侵食の結果面白い形になった岩塊など、集落の人々の知的な関心とか自然の偶然な作用への素朴な驚きが根底にあることがわかる。

### 7 徳和瀬

この集落に住む松山光秀氏の詳細な研究があり、その中でノロ祭祀が行われた時代の集落の構造が復元されている（注11）ので、その研究に従ってまとめることにする。

徳和瀬の集落の中心は海岸から1 km 以上離れた傾斜地に位置している。白嶺神社が集落の西、県道からすぐの山手にある。現在の白嶺神社のあるところはティラ山と呼ばれる神山である。松山氏によれば、神域はその上のアークントーと呼ばれる山に及んでいた。ティラ山の下には親ノロの墓のあるチンシ（積石）山が続き、かつての集落はその下に中心があった。ノロの祭祀のルートは2本あり、ミヤーと呼ばれる集落の儀礼場所を出て神道を通り、イビガナシ（この集落では「親ノロが入って消えた場所」がイビガナシと呼ばれた）からチンシ山に入るものと、アークントーから南に下りて谷間を川沿いに浜まで下りるものがあった。その近くに風葬墓があり、浜下りの行事が行われた。またティラ山のそばを、アークントーに発するカマミゴーという川が流れているが、そこでノロが禊をし、産湯もそこで汲まれたそうである。

かつての浜下りの場所に注ぐ川は、今上流が廃車置場になり汚水を海に注いでいる。またティラ山とチンシ山は県道によって分離されてしまっている。集落のかつての祭祀空間は、従って今みるかげもなく崩れてしまっている。

### 8 亀徳

もともとアキチュとよばれた集落は台地の間を流れている亀徳川の川口の両岸に集中している。1609年3000を越える薩摩兵が2月21日に鹿児島島を出航し、まず奄美大島各地で戦闘を行って征服、3月20日この亀徳に上陸した。薩摩軍はこの戦いに勝利し、4月には沖縄本島で首里城を落とした。ちなみに亀徳の戦闘に参加した武芸の達人で神之嶺の豪族であったウシシギヤは、敗北を見て神之嶺に逃れ、自宅に放火して自害した（注12）といわれており、その墓が神之嶺の共同墓地の一角にある。

この集落には水かけ祭りという年中行事があり、当日集落を縦断する県道を通ると必ず水をかけられる。大陸ではタイ族の祭りとして知られている。

#### 聖地

ジョウゴウ（溝川）神社が集落の氏神である。もともと社の裏手にあるガジュマルの根が囲い込んでしまっているイビガナシを中心とする祭祀場所であった。境内に隣接してトネ屋敷や蔵の跡があり、今は民家となっている。西側の山（テラ山）を向かって右手のほうから上っていくと道端に拝所（といっても何の建築物もないし目印もなく、わずかな裸地があるだけ）があり、さらに少し上ったところの崖にトゥール墓（洞穴墓）がある。

ジョウゴウ神社のご神体は、ノロ神を中心にして、農耕の神とテンゴの神の3体である（注13）。テンゴの神とは天狗のことで、超自然的な力を持ち病気を治すことができる神と考えられている（注14）。

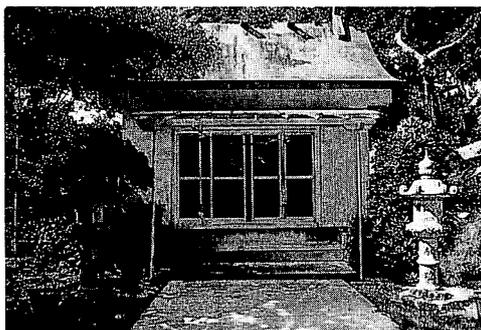


写真3 ジョウゴウ神社の社



写真4 木の根が抱え込んでるイビガナシ

墓地

現在は東北部の丘の上にある。もとは金久浜にあったが埋め立てられたため移転したものである。人口が集中する亀徳川の川口の東側には、港湾施設があり、埋め立てが行われ、昔の浜辺の様子はわからなくなっている。

**9 亀津**

徳之島で最も都市化の進んだ地域である。街の海側半分は満潮のときには海になる、さんご礁でできた広大な陸棚を埋め立てたものである。奥にある台地が大瀬川をはじめとする川の流入で削られ、独特の地形となっている。

聖地

丘の上にある高千穂神社は明治2年、排仏毀釈の風がこの島にも及び、安住寺が廃されたあと、建立された。ここがノロの祭祀と関係していたか不明である。しかしこの丘の裾には洞穴墓が多くあり、テラとも呼ばれる。

亀津森は亀津中区の住宅地の中にある。ノロを祖先とする家系の方が祭事を行っている場所である。榕樹の下に灯籠が立っているにすぎない場所であるが、かつて亀津全体の住民の信仰する場所であり、豊穰祈願、安産祈願、旅の安全祈願などが行われていたという（注15）。

この高千穂神社のある台地の北にある別の台地の下に古勝森と呼ばれる場所がある。信仰しているのは約20世帯で、彼岸に一重一瓶を持ち寄り、ここに神酒や食事を供え宴会をする。この場所は石垣が積まれた周囲より高い台で、大木があり、その下に文政8年の年号がみえる石碑が立っている。何が祀られているのか諸説がある（注16）。悪疫から守ってくれる、大火を免れたなどの御利益があるとされている。古勝森付近の丘の中腹には洞穴が多い。古い時代この場所は洞穴の風葬場所の詣墓ではなかったかと思われる。また古勝森のある地区には殿地という名の残る屋敷がある。独特の石垣が残り琉球王朝時代から薩摩時代まで役人の住居であったことを示すものだそうである（注17）。

中区の個人の庭先にあるのが豊島森で、岩の上にコンクリートで囲まれた祭壇が作られている。豊島家系の氏神として祭られている（注18）。

その他にも神社があるが省略する。

墓地

街の北と南にある。北の亀徳に近い大規模な墓地は埋め立てが行われる前の海岸に位置している。この墓地をみおろす丘の中腹に秋葉神社が建立されている。南の墓地は県道の改修工事で移転されつつある。トーチバカと呼ばれるのはノロの時代の殿地と関連があるからかもしれない。

**10 白井**

亀津から西に一般地方道617号線を6km行くとこの集落がある。集落と言っても今は3軒しか住んでいない。戦後は一時40世帯くらい住んでいたそうである。

聖地

「徳之島採集手帖」(p.206~207)に記されている徳富氏の報告によれば、白井神社(オテラとも呼ばれる)の起源は集落からややはなれたところにあるミヤヤマ山頂にあった祭祀場である。遠いので集落のそばの丘に移し、さらに1969年に今の場所に社が建立された。白井の集落は伊仙町の目手久からの分村だといわれている。ミヤヤマでは目手久の親ノロが儀礼を行っていたと言われ、白井神社の御神体の一つはその親ノロの名、ミュヌトヨマシであるとされている。分村の時期はノロの祭祀が行われていた頃であるから16世紀にまでさかのぼる。

#### グスク

集落のすぐそばの小丘がそう呼ばれている。詳細は不明である。

### 11 尾母

亀津から白井に通じるルート上にある内陸の集落である。ここから南東の海岸(南原)まで2kmほどの距離がある。集落のある台地は伊仙町との境を北西から南東に流れる本川と、集落の北を東に向けて流れる川の2つの水系にはさまれている。

#### 聖地

集落中央の山の上まで階段をのぼったところに社が建立されている。この神社がノロ祭祀と密接な関係を持つことが報告されている(注19)。それによれば神社を管理する守田家にノロの記録があり、祭具である盃の起こす奇跡(3回こすると神が降臨して集落の水源である井堰の水を流した)の伝承もある。ノロ祭祀に関係する地名として、ウッカン(「大繁務」というノロの階級に関係する役職名からきている)屋敷、ノロ田あるいは祭り田等が集落の中に残っている。

基本的にはノロ時代の祭祀の軸が集落を貫く南北の線上にあったようだ。おそらく浜下りの行事は南原の海岸まで行って行われたのであろう。

#### グスク

集落の南に大谷山があり、その南側が「ウシクド」と呼ばれ風葬墓のあったことが知られている。風葬墓は徳富氏の調査によれば、この近くの本川沿いの他に、台地の周辺部に点在し、さらに南原の海岸の崖にもあった。

### 12 集落の祭祀空間

徳之島町の集落はここで触れたところ以外に、上花徳、花徳、諸田がある。しかし資料が少なく、調査もできていないので触れなかった。

聖地として集落の信仰の中心となってきたのは、ほとんどの集落において琉球王朝の支配下にあった頃のノロ祭祀に関係が深い場所である。薩摩支配下の仏教(禅宗)の影響は驚くほど希薄で、明治以降の神道がノロ時代の信仰の名残を吸収して保存してきたといえる。しかし、ノロ祭祀の時代は歴史的にそれほど長く続いたわけではない。徳之島が琉球王朝の支配下に置かれたのは15世紀前半であるが、役人や司祭であるノロが派遣される、もしくは任命されるのはもっと後になったことであろう。薩摩の支配が250年以上続いたことを考えると100年以上短い。にもかかわらず、今日までノロの時代の信仰がはっきりと形を留めているのはなぜであろうか。それはまず仏教が奄美諸島の宗教的な風土になじまなかったのに対して、ノロ祭祀はそれ以前からあった土着の信仰の形とそれほどちがっておらず、違和感なく迎えられたということである。ノロ祭祀は集落の伝統的なアニミスティックな信仰を統合し、一つの全体的な宇宙観へと高めたが、土着の信仰のすべてを統合できたわけではない。その理由は、風葬地や水神信仰の儀礼の場所が空間的に分散し過ぎていたこと、あらたに個人的に信仰されるようになる神を、いちいち集落全体の祭祀体系に組み込めなかったことなどがあげられると思う。

ノロの時代に体系化した集落の祭祀空間には共通点がある。琉球王朝の役人が住んだ場所の近くに祭祀の中心を設け、神山、浜下り行事の行われる風葬地のそばの海岸そして水稲耕作に不可欠な水系を結びつける神道を通して儀礼を行った。そして重要な場所では夜籠りして神と交流した。しかし、井之川のような例はあるけれども、グスクと呼ばれる場所については、たとえ風葬墓が多くその周辺にあっても、ノロはその祭祀体系に取り込もうとしなかった。「グシク時代」と呼ばれる時代はノロ制度が導入されるはるか以前に始まっており、おそらくノロの持ち込んだ信仰の制度が容認できない、集落の安全と繁栄、豊穰を保証する神々の信仰とは異質な要素をグシクがもっていたのであろう。

最後に資料についてふれておく。徳之島の民俗調査資料としては徳富重成氏の残しているものが、量、質、範囲の広さにおいて他を圧倒している。徳富氏の資料中にはすでに亡くなってしまった古老から聞き取りで得た貴重な情報も多くある。情報にあいまいさを感じ確認しようにも、もはや情報提供者がみつからないわけである。島民の若い世代が貴重な郷土文化が失われていくことに危機感を持ち、保存し発展させていくために行動することが必要であろう。しかし、集落の外観や生活の形が変化していく中で、観念世界が変わるのは当然のことである。島外からの研究者の立場としては、過去の記憶を聞き出して書きとめるだけでなく、こうした変化を記録するのもやはり調査のうちである。

#### 脚注

- (1) 山田忠市氏の所有する、ノロの免状及びノロ関係文章。1967年6月に、徳之島町が「有形文化財」に指定した。
- (2) 徳富重成、「雑記集成(3)」、1993年発行、p.128。
- (3) 1991年7月発行「山だより」中の「竹原藤澄翁遺稿(2)ヌグル山の昔話」。
- (4) 「徳之島採集手帖—徳之島民俗の聞き取り資料—」、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所、1996年3月発行、p.169~172。
- (5) 徳富重成、「雑記集成(3)」、p.129。
- (6) 「徳之島研究会報」第24号、1999年10月発行、松山光秀「徳之島町母間の線刻画石群の調査報告—調査ノートから—」。
- (7) 徳富重成、「雑記集成(3)」、p.132~133。
- (8) 「徳之島調査報告書(1)」、沖縄国際大学南島文化研究所、1985年発行、p.4。
- (9) 徳之島町立図書館郷土資料室、小林文庫「徳之島町文化財」、井之川のアムトガナシについて、1973年9月の調査報告。
- (10) 「徳之島研究会報」第14号、1988年11月発行。
- (11) 松山光秀「神之嶺校区の文化財めぐり」、「徳之島町立神之嶺小学校創立100周年記念誌」所収、1996年12月発行、p.26~37。
- (12) 徳富重成、「雑記集成(3)」、p.137。
- (13) 「南島研究第7号」、南島研究会、1971年発行、p.14。
- (14) 同上。
- (15) 「徳之島採集手帖」、p.57、1968年10月の徳富重成の調査。
- (16) 小林文庫、「徳之島文化財」、1967年2月の徳富重成の調査。
- (17) 「徳之島郷土研究会報」第21号、1997年発行、p.116~117。
- (18) 同上、p.112~113。
- (19) 「徳之島採集手帖—徳之島民俗の聞き取り資料—」、p.204~205。

#### 参考文献

- 1 酒井卯作、「琉球列島における死霊祭祀の構造」、第一書房、1987年発行。
- 2 仲松弥秀、「神と村」、伝統と現代社版、1975年発行。
- 3 小野重朗、「南島の基層文化」、法政大学出版局、1977年発行。

# SANCTUAIRES ET CIMEIÈRES

“Dans le cas de Tokunoshimacho”

Hiroshi TAKANO

*Department of Socio-Information*

*Faculty of Informatics*

*Okayama University of Science*

*Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan*

(Received November 1, 2002)

Tokunoshima est une des Iles Amami ou la tradition religieuse de l'époque de Royaume Ryukyu s'enracine profondément dans l'espace villageois, malgré la politique des aménagements qui aboutissent très souvent à la destruction d'environnement.

Les sanctuaires, tantôt avec un temple shintoïste récemment construit, tantôt avec une petite chapelle dans laquelle se trouvent des pierres sacrées, ne peuvent plus avoir l'importance rituelle d'autrefois. Pourtant les villageois n'ont jamais perdu le sentiment de respect religieuse vis-à-vis de ces endroits pleins de légendes et tabous. Ces sanctuaires relient avec des sentinels pour les rites la montagne sacrée et les anciens cimetières propres à chaque village.

Nous essayons dans cet article de rétablir la structure rituelle de l'époque de noro, prêtresse nommée au XVI siècle par le Royaume Ryukyu, et aussi d'analyser les croyances plus primitives de cette régions.